

特集にあたって

新型コロナウイルス感染症の流行が市民の生活に、そして医療の世界に多大な影響を及ぼしています。われわれ医療従事者としては、一刻も早く流行が終息して市民の生活が元通りになるよう最大限努力すると同時に、ただ元通りにするのではなく、これをきっかけにさまざまなことを見直し、次への備えにつなげることが望めます。例えば、多数のイベントが流行終息後に延期されている現在の状況は、今号の特集テーマである“ファーストエイド”の重要性を再認識する、よい機会になり得るでしょう。

ところで、“ファーストエイド”とは具体的にどのような行為のことを指すのでしょうか？『JRC 蘇生ガイドライン2015』では、ファーストエイドを「急な病気や怪我をした人を助けるためにとる最初の行動」と定義し、「どのような状況においても誰によっても開始されうるもの」としています。また、その目的は「いのちを守り、苦痛をやわらげ、それ以上の病気やけがの悪化を防ぎ、回復を促すこと」であり、適切なファーストエイドがなされることで、けが・病気から早く回復する可能性が高くなり、救命率や社会復帰率の向上にもつながると考えられます。そして、このようなファーストエイドを実施するためには、ファーストエイドが必要な病気やけがを認識すること、適切な処置の技能を身につけておくこと、ただちに必要な処置を行えること、処置の限界を理解して必要に応じ他者に委ねることが求められ、これらはある程度の医学的なエビデンスやコンセンサスに基づいていなければなりません。

このようにファーストエイドの定義や目的を改めて明記してみると、「一般市民ができるレベルのもの」「救急医や救急隊員ならできて当然」と簡単に済ませられるものではないことがわかります。いざファーストエイドが必要な場面に遭遇したとき、「え…どうするんだっけ…プロなのに…」となってしまうかもしれません。しかし、すでに臨床・現場に携わっている医療従事者にとっては、ファーストエイドについてイチから学び直す機会が少ないことも事実でしょう。そこで今号の特集では、「今さら聞けない!? 学ぶ・教えるファーストエイド」と題して、医療従事者向けにファーストエイドの方法・コツ・指導法・エビデンスなどを整理することとしました。

救急医を中心とする医療従事者がファーストエイドをきちんと理解しておくことは、医療従事者本人のより適切な対応はもちろんのこと、例えば、イベント救護の講習会でスタッフに、あるいはプライベートでたまたま周りにいた一般市民に、ファーストエイドを正しく指導できることにもつながります。それがひいては、地域と社会のセーフティネットを整え、人々の健康を守るための重要な一歩となるはずです。エキスパートの知識や経験を凝縮した充実の増刊号を、お届けします。

『救急医学』編集委員会

企画担当：国家公務員共済組合連合会虎の門病院救急科 軍神 正隆